



Title	日本語討論番組における会話ストラテジーについて
Author(s)	土井, 香乙里
Citation	Osaka Literary Review. 1999, 38, p. 118-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語討論番組における 会話ストラテジーについて

土 井 香乙里

1. 序

会話では、さまざまな話題について話され、そしてそれが話し手、聞き手によって展開させられることで会話が発展していく。実際、ある事柄を導入する上でどのようなストラテジーが使用されているのであろうか。つまり、どのような方法で自分の言いたいことを会話で言い、話を進めていくのであろうか。本論では、日本語討論番組での対話をデーターとし、会話参与者的論の進め方を観察しながら、その会話ストラテジーについて考える。

1. 1 先行研究

◇Scollon, R. and S. W. Scollon (1995)

- (1) I suggest that we delay making our decision until after Legco makes its decision. That's because I think a certain amount of caution in committing to TV advertisement is necessary because of the expense. In addition to that, most of our production is done in China now, and it's not really certain how the government will react in the run-up to 1997.
- (2) Because most of our production is done in China now, and uh, it's not really certain how the government will react in the run-up to 1997, and since I think a certain amount of caution in committing to TV advertisement is necessary because of the expense. So, I suggest that we delay making our decision until after Legco makes its decision.

この例は、ビジネス場面での、(1) American businessman と (2) Chinese

businessman の話し方である。(1) では、「決定を遅らせる」という提案を初めに話し、次にそうする理由を付け加えている (→Deductive pattern)。つまり、ビジネスの場で、自分の言いたいことが重要な側面であると考える彼らによれば、注意を最初に持ってくるこういった形を採用することが効果的な話し方であるとされ、主に、西洋で受け入れられる型である。

X (comment, main point or action suggested)

because of Y (background, reason)

この型は主に西洋で好まれる Topic-first 型である。

それに対し (2) では、最初にそうする理由を話してから、最後に提案を持ってくるという話し方をしている (→Inductive pattern)。

つまり、最初に、自分の論の支持的事柄 (minor point) を持ってきて、そこから一番言いたい事柄 (main point) を引き出す形である。

Because of Y (background, reason),

X (comment, main point or reaction suggested)

日本を含めたアジア型 (Topic-delay 型) は、こういった言い方がよくされる。

Deductive (western pattern)	Inductive (Asian pattern)
«Topic-first 型» Comment, $>$ reason, background	«Topic-delay 型» Background, $>$ main point reason comment

このように論の進め方が、文化社会により異なるので、intercultural なビジネスの場面では、miscommunication が起こるとされている。しかし、彼らも言うように、これらははっきりとした二分法ではなく、どちらの文化にもそれぞれの形が表れるので、一般的にこういった傾向があるとしている。

また、この discourse pattern の違いは、導入の仕方の型に差があるのでなく、場面、会話者の役割等の文化的違いによるもので、“Face” の概念にも深く関わっており、互いの推論の違いのために miscommunication につながるとされる。

1. 2 研究の目的

本論では、日本語討論番組での論の進め方を観察し、話題導入のストラテジーについて Scollon, R. and S. W. Scollon (1995) のいう Deductive / Inductive pattern が実際にどのように対話に表れているかを考える。明快な論の展開が求められる討論において、日本語では彼らの言うアジア型のみが見られるのか、あるいは、Deductive な論の進め方が見られるのか、ということを観察する。

2. 方法

2.1 データ

本論で使用するデータは次のようなものである。

- ・テレビ朝日「徹底討論／今こどもたちが変だ。」(1999. 12. 放送)

(約40分)

司会者：C：久米宏 対 4人のゲスト

T: 田中真紀子
 K: 倉本 聰
 M: 宮台真司
 Y: 山田まりあ

討論番組（日本語）の対話を録画し、詳細に文字化したものを使用する。また、文字化の際には、実際の対話を正確に表すために次の表記法を使用する。

[] : the onset and the end of a spate of overlapping talk

--- : pause

- = : latching between utterances
≪ ≫ : backchannel
▽ : place where backchannel is signalled in receiver's utterance
→ : specific parts discussed

* * * * *

2.2 分析方法

分析方法として、録画し、データーとして書き起こした対話を、内容等、意味的観点からどこが会話者の言いたい論点であるかを判断し、どのような論点導入のストラテジーが使用されているのかを考える。

3. データの分析

実際に対話内でどのように導入のされ方があるかを見る。

[例1]

C：あの～、私、若い頃、電車乗ってて、
子供連れたお母さんが、その～、
空いてる席平気で靴のまま子供が上がってですね、
窓の外見たり何かして、
あっち走り回りこっち走り回り、
母親が何の注意もしない。
で、一回僕、全く知らない子ですけど、
はり倒したことがあるんです。電車の中で。
あの、ほんとにね、
傍若無人に子供が振る舞っていても
それはレストランなんかでも同じなんんですけど、
親が何の注意もしないんですね。

で、こういう子供たちが父親や母親になったら、
世の中どうなるんだろうと思ったことはあるんですけど、
それ今なんですよね。

ふつうの子が描く絵が

このところがらっと変わったことを指摘する人がいます。

このCの発話では、一番言いたいことを最後にもってきている。つまり、Scollon R. and S. W. Scollon のいうところの Topic-delay のかたちをとっている。初めに、自分の若い頃の体験を話し、そのことから自分の一番話したいこと、つまり main point につなげているといえる。

[例2]

Y：（前略）--- 例えば、はさみを人に渡すとき人に、
何気なく自分が持つほうを渡して、---
人に「はい」って渡すと、
その人が振り向きざまにとった時に
手が切れてしまうかもしれない。
だから、
自分が刃の方を握って他人に持つところを渡すんだよ、
っていうようなすごい当たり前のことだけど、
最近思ったんですけど、
これができる方ってなかなかいないんですよね。
そういうことを---
基本的なことを教えてもらえば、
刃物が怖いって事とかもわかってきますよね。
それなのに、今、変な事件多いじゃないですか。

K：その---はさみの話が出ましたけどね、
あの～、

本当にそうだと思うんですね。

例えば、ナイフを使うっていうのは危ないことだって、

ナイフはみんなこう---

使っちゃいけないってすぐ言っちゃう。

だけど僕たちの子供の時代っていうのは、

森の中でナイフを使い、

そしてそのナイフの危なさを---

体中こう--年中傷をつけててね、

身をもって知ったわけですね。

これ、母親たちが、---

禁止しちゃったと僕は思うんですね。

こうやって、昭和20年代にね、

あの---どっかの山の上のその-----

貯水池に、子供が落っこちましてね、

で、---それを---

国の管理責任っていう裁判があったんですよ。

そのころから管理責任ってことが

やたらと言われるようになりだしたんですよ。

管理責任ってことのなかで、

どんどんどんどん子供を親が---

そういうその---現場から遠ざける。

で、その---当時ほら---

戦後の民主主義がはいってきて、

民主主義って言うのは

権利と義務っていう両輪で進んでいくものだけども、

それまで義務義務って言われていたけど、

いきなり権利が認められたからみんな権利にとびついちゃって

義務ってことを忘れたわけですよ。
 つまりみんな権利主張を親もするわけですが、
 義務を怠った、
 と思うんですね。
このポイントがね---子供をおかしくしちゃった
一番の犯罪の---お---地点だという気がしますけどね。

この例でも同様に、Kが、前発話者の発話に関連していることを言い、さらに、前置き的なこと（背景となっている事柄）を言いながら、一番に言いたいポイントを最後にもってきている。つまり、Topic-delay型の論の進め方である。このにある意味では回りくどい話し方と感じられる。

次に、反対の例を見る。

[例3]

→M：この問題が深刻なのはね---

実はこれ--今の法制度のもとでも--

教育長さんと校長先生が合意をすれば、

中学校からも、小学校からもクラスをなくなせるし、

個人カリキュラムを導入できます。=

=ある 「程度は---」

C： [例えれば、] 港区なら港区でも△できるわけ---

M： ≪できるわけです。≫

ただそれをしないのはね、

クラスをなくしましょうということをやりますよね。

そうすると、

そんなことをして偏差値が下がったらどうするんですか！

っていう親が反対をします。

この例では、先2つの例とは反対に、先に自分の言いたいことを言い、その後でそれについて説明している。Mの発話途中でCの発話が重なっているが、ここではこれは話者交替が行われず、相づち的な働きをしているのでMに話者順番があるとする。

[例4]

T: 何か日本の社会の、

メンタリティーのどこで思うんですが、

何か一緒に、--

その~、「護送船団」って言葉が、ちょっと、

その、経済や、--政治、の社会で言われますけども--

常に、やっぱり一緒にあるということの安全性、---

このことがありますね、

日本の社会をわめて息苦しくしているんですね。

教員もそうだし、生徒さんもそうだし、

お母様方の--タイプも結構そうで、

どうかって言うと、

「なんとかなのよね~。」とか「そう思いません?」とか、

常に、こう、同意を求めていてですね、

自分だけ、自分の足で立って、

私は違っていたってかまわない。と。

DNAが違うんですから。違って当たり前なんですよ。

違うから、自分もいいし、人も立派なはずなんですから。

この例でも同様に、最初に言いたい論点を持ってくることで、明快さをあらわし、さらに説明的に付け加えている。

[例 5]

M: ところがややこしいところで、

制度を変えて、

自分たちで自分のことを選べるんですよってやってやっとても、

田中先生がおっしゃったように、

結局横並びになっちゃうことがあるんですよ。

みなさん地方だったらリアルかもしれませんが、

地方のその---いわゆる教育委員の人が---

かなんかっていうのは、たとえば

あの---先祖代々教員をやってると---

で、何とか教育大、地元の教育大出て---

で、親もじいさんも教員やってると。

で教頭試験受けて、校長先生なって、

教育委員なって上がりという、

地方ローカルエリートコースっつうのがあるんですよ。

でその---教育委員たちにへばりついた

昔ながらの既得権益ってのがあって、

この人たちがね、

旗を振って教育改革をやることっていうのがね、

本当に難しくなっているんですね。

だから本当は僕たちが考え方をえていかないとね、

制度が変わっただけでは、

実はまたおんなじものを選んじゃう。

制度をえると同時に

例えば、こういう場やいろんな場を通じて

僕たちが考え方をえないとね、

制度が変わっただけでは、---

実はまたおんなじものを選んでしまうってことがあるんですね。

この例でも同様に、先に重要な論点がきているが、上記2つの例と異なることは、さらに最後のほうにも再度言いたいことを強調するために、論点を繰り返していることである。

4. 結論

この日本語討論による対話データ内で、2種類の (cf. Scollon, R. and S. W. Scollon 1995) 話題導入の仕方が見られた。発話者による頻度の結果は以下のようになった。

	Topic-first 型	Topic-delay 型
C	5	3
T	2	7
M	8	5
K	0	5
Y	3	1

本データからいえることは、全体としては、言いたいことを後にもってくる topic-delay 型 (Asian type) の方がやや多かったことである。しかしながら、それだけ見られるのではなく、最初に論点を持ってくる方法、つまり Inductive pattern と、とのほうに注意をひきつける形である Deductive pattern の両方を使用しながら論を進めていることがわかった。このことから、日本語の討論場面では、Topic-first／Topic-delay 型両方を織り交ぜながら論の展開にメリハリをつけてているのではないかと思われる。つまり、どちらかの形だけの話の進め方ではなく、両方の型を使い分けながら、論を進めることによって効果的な話の展開ができるのではないかと思われた。

また、Topic-first型／Topic-delay型は、言語によってある程度の傾向はあるかもしれないが、どちらかといえば、場面によって異なるものもあるし、個人の特徴によるものの方が大きいのではないかと思われる。例えば、司会者であるCは、その立場により明確な論の展開が求められている結果であるといえるし、また、M(都立大学の教授でこういった問題の専門家)もTopic-first型が多かったが、その職業上の特質が反映された結果といえるのではないかと思う。

本論では、日本語討論番組による対話での論点の導入の仕方について見てきた。日本人は一般的にTopic-delay型(Asian型)であると言われるが、討論では、ある程度Topic-firstのストラテジーも使用することが分かった。

さらに、今後必要なこととして、さらにデーターを多く観察し、英語討論での対話を見て、論の導入の仕方に日本語・英語間で類似点・相違点があるかを考えるとともに、interculturalな場面、日本語会話(日本語話者と非日本語話者)、英語会話(英語話者と非英語話者)で論点の導入の違いでどういったmiscommunicationが起こるかを考えてみたい。

主要参考文献

- Coulthard, Malcolm (1977) *An Introduction to Discourse Analysis*. Longman.
- Hutch, Evelyn. (1992) *Discourse and Language Education*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Maynard, S. Kumiya. (1989) *Japanese Conversation: Self contextualization through Structure and Interactional Management*. Norwood, Ablex.
- Scollon, Ron and Suzanne W. Scollon (1995) *Intercultural Communication*. Basil, Blackwell.
- Tannen, Deborah (1984) *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*. Norwood, Ablex.
- Tsuda, Sanae. (1994) *Danwa Bunseki to Communication. [Discourse Analysis and Communication]* Tokyo, Liber Press.